



泗水小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 泗水小」



泗水小学校
学校だより No23
文責 芹川博文
10月20日(金)

「でも、なぜ落ちてるんでしょうね」 ～ はっとさせられた一言 ～

ある朝、ゴミを拾った袋を持って通学路を歩いていると、一人の児童が独り言のように「でも、なぜ落ちてるんでしょうね。」とつぶやきました。思わず、「なかなかいい質問です。そうなんです。そこが問題なのです。」

と言ってしまいました。

お菓子のゴミも落ちていますが、残念ながら、タバコの吸殻やビールの缶なども落ちています。それらを拾ってくる児童を見ると、こちら「ごめんなさい」と謝りたくなります。「ゴミの持ち主」を責めたくもありません。



しかし、ふと思い出しました。「私が子どもの頃(約50年前)は、こんなものじゃなかった」と。一番思い出すのは、ガムの食べかすです。包まずに吐き捨てる人が多かったこと。私も靴で踏んだり、服や髪の毛に着けたりしたことは数知れません。母親から「まーた草むらばゴロゴロしよったばいな」と怒られたものです。

あの頃に比べれば日本のマナーも向上し、街もきれいになりました。だからこそ家庭や地域も含めて教育の力に期待もし、同時に責任も感じます。そして、この子どもたちが大人になった時、彼らの子どもが通う通学路は、ゴミ拾いする必要がないことを願います。



「よくわかる泗水小」を目指して ～ 学校情報の一枚 配布しました ～

「泗水小学校の生活・学習・その他の情報を一枚にできたら便利ではないか」という思いで作成しました。その間、学校運営協議会や児童会の「泗水小サミット」などを経て完成した一枚です。(後期になってしまい申し訳ございません。)

是非、ご家庭の見えるところに掲示(または置いて)いただき、ご活用ください。今後、新1年生や転入生にも提示していきたいと思ひます。基本的には年度ごとに更新する予定です。

ニュースから思うこと

～ 「そこに住んでいる人がいる」 ～

中東のカタールという国に住んだことがあります。今から約10年前、私はドーハ日本人学校に3年間勤務しました。夏は45～50℃にもなる国で、様々な異文化体験を味わいました。その中で印象的だったこと2つを紹介します。

1つ目は、イスラム教の人々に対するイメージです。行く前は、正直「怖い」という気持ちでした。しかし、会ってみると人々の優しさが身に沁みました。例えば、理科で地層を見るために学校の周りを児童数名と歩いていると、「大丈夫か?」「困ってないか?」と、何人も車を止めて声をかけてくれました。あまりの暑さに「歩いている人=困っている人」に見えたのでしょう。

2つ目は「血の涙」切手(右写真)です。初めて見たときは衝撃的でした。しかし、よく見ると、英語で「カタールはガザのために涙を流しています」と書いてありました。



ここ数日報道されるニュースに心を痛めます。複雑な歴史的背景があることから軽々しくは言えませんが、そこで暮らしている(いた)人々がいること、「当たり前」に学校に通っていた子どもたちもいたであろうこと、そして、今、平和が奪われていることは確かです。知ること、知ろうとすること、無関心にならないこと・・・できることを考えながら過ごさねばと思わされます。

